

■開催概要

- シリーズ名称 : 2020 鈴鹿クラブマンレースRound5
- 主催 : 京都レーシングハイブリッドクラブ (KRHC)・鈴鹿モータースポーツクラブ (SMSC)
- 協力 : ARC・ARCN・OCCK・チーム淀
- 後援 : 国土交通省 (F4クラス)
- 競技 : JAF公認・準国内格式 公認番号2020-3003
- 会場 : 鈴鹿サーキット西コース (3.475km)
- 開催レース : 総参加台数/85台
RS・CS2/11台
スーパーFJ/19台
FFチャレンジ/20台
フォーミュラEnjoy/17台
F4/8台
サーキットトライアル/10台
- 開催日 : 2020年9月20日 (日)
- 天候 : 雨のち曇り
- 路面 : ウェット→ドライ

■次回レース開催概要

- 開催日 : 2020年10月10日 (土)、11日 (日)
- 主催 : オートスポーツクラブアツタ (AASC)・鈴鹿モータースポーツクラブ (SMSC)
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.807km)
- 開催クラス : F4、スーパーFJ、FIT、フォーミュラEnjoy、CS (シリーズポイント対象外 特別戦)



何度も空模様に変化したレース開催日。各クラスの決勝レース前には路面は乾きドライコンディションになっていた
(写真はフォーミュラEnjoyの決勝レース直前)

変わりやすい秋空の下で開催 2レース制のスーパーFJに注目!

2020年のシルバーウィーク期間にあたる9月20日(日)。7月25日、26日に開催された前回の鈴鹿クラブマン第4戦以来となるレースが開催されました。

新型コロナウイルス感染拡大を受け、鈴鹿クラブマン第2戦と第3戦が中止となったことから、実質的には今シーズン、3回目の開催です。徹底して行われている入場ゲートでの検温の実施だけでなく、レース中もチーム関係者、もちろんオフィシャルスタッフも徹底してマスクを着用。レース後に行われる仮表彰式でのシャンパンファイトも一時的に控えられています。また、表彰台に立つドライバーには、登壇の前にオフィシャルスタッフが1人1枚、マスクを配布。表彰台に立つドライバーらは、恒例のフォトセッションでもマスク着用で臨みます。こうした十分な感染症対策をしながらレースは進行していきました。

さて、舞台を鈴鹿サーキット 西コースに移しての第5戦。当日、朝8時15分からの公式予選前には雨が降り、路面はウェットで迎えることになりました。その後、公式予選を終えた11時頃には曇り空、時には晴れ間も見える天候になり決勝レース時の路面はドライへ。「変わりやすい秋の天気」の言葉通り、どんどんと変わる天候を味方に付けたドライバーが勝利へと近付いたことは間違いありません。

この日、見どころの一つだったのが2レース制を採用して、第4戦、第5戦を行ったスーパーFJクラス。ここまで2戦2勝で迎えた岡本大地選手は第4戦でもポールtoウィン。その力を見せつけると、リバースグリッドとなった第5戦でも6番グリッドスタートながら、ここでもトップチェッカー。コンディション調整が難しいシーズンであるにも関わらず4戦4勝。次戦を待たずしてシリーズチャンピオンを確定させ、最終戦では完全優勝を掛けたレースになります。

次戦は早くも10月10日(土)、11(日)。舞台をフルコースに移して行われ、スーパーFJクラスの最終戦や、JAF 地方選手権F4など見逃せないレースが予定されています。



ナンバー付き車両によるサーキットトライアルも実施。午前、午後の計2ヒートでラップタイムを競った
(写真は第1ヒートのグリッドへの試走直前)

■スーパーFJ Class 第4戦

岡本大地がポールポジションを獲得してレースはスタートする。だが、まさにスタート直後、5番グリッドの西村和真が前を走るマシンと激しく接触、レースはすぐに赤旗中断となる。約25分後にスタートのやり直し、1周減算となる13周で再開される。岡本、下野璃央、元嶋成弥が上位陣を形成。序盤こそ波乱の展開だったが、岡本は終始、安定した走り方で7周目が終わる頃には2番手を走る下野に約2秒のタイムギャップを築く。元嶋、太田浩、上野大哲による3番手争いが激しくなるなか、トップはそのまま岡本がポールtoウィン。2位は下野、元嶋は3位でチェッカーを受けるも、最初の接触によりリアウイングが破損。ペナルティを受け最終的には太田が3位表彰台となったが、最後まで意地を見せる走りが印象的だった。



ここまで2戦2勝と波にのる岡本大地が、この日もポールポジションをゲット。だが、オープニングラップから波乱が待つ展開に



序盤こそ荒れた展開になったが、終わってみれば岡本大地(写真中央)が手堅いレース運びで強さを見せつける流れになった

■RS・CS2 Class

ポールポジションを獲得したのはRSクラスの阿部博行だ。阿部は序盤から近田直人とテールtoノーズでトップ争いを展開する。CS2クラスはトップに付けていた翁長美希がスタートに失敗。代わっていむらせいじがクラストップとなり、金久憲司、TOMISANと続く。大城一は近田をパスして、2番手に付けてトップの阿部を迫る。だが、その差は詰まらず、阿部、大城、3番手の見並秀文までがそれぞれ単独走行になる。終盤にかけてもトップを快走し続けた阿部が一度もトップを譲らずにRSクラスのウィナーとなった。CS2クラスは総合4位のいむらせいじがクラス優勝、クラス2位でファイナルラップまで走行を重ねていた松本吉章は痛恨のスピンので順位を下げ、金久が逆転でクラス2位となった。



表彰式/RS RSクラスの阿部博行がポールポジションを獲得。CS2クラスは翁長美希が5番グリッドに付けたが、スタート失敗が響いた



表彰式/CS2 速さを見せつけた阿部博行が優勝(写真中央)。序盤こそ近田直人とテールtoノーズになる場面も見られたが終始、安定していた

■フォーミュラEnjoy Class

レースは大川文誠がポールポジションを獲得。だが、オープニングラップのショートカットで上位陣の複数車両を巻き込んだ接触が見られる波乱の展開になる。この影響により3番グリッドスタートだった山根一人がマシンを止めるなか、4番グリッドスタートだった辰巳秀一が展開にも助けられる形で一気にトップに躍り出る。辰巳、大川、安田知弘がトップ3となる。レースが後半に差し掛かる頃、辰巳と2番手を走る大川とは約1秒の差があったが、その後、大川が怒涛の猛追。ついには終盤で辰巳をパスして大川が前に出たものの、辰巳はすぐさまヘアピンで再び大川をオーバーテイク。トップの座を死守した辰巳がトップでチェッカーを受けた。



4番グリッドスタートながら優勝した辰巳秀一。スタート前にはチーム関係者以外に、家族も応援に駆け付けていた



トップ争いにも負けないほど白熱したのが3位争い。芦田将吾らとの接戦を制した山崎一平が表彰台を獲得した

■スーパーFJ Class第5戦

第4戦の結果を受けて、上位6台はリバースグリッドを採用。上野大哲がポールポジション、2番グリッドに岡本大輝、3番グリッドに佐藤巧望が付いた。レースは佐藤がスタート直後に好発進を決めてトップに付けると、前回優勝で6番グリッドとなった岡本大地も一気に2番手の位置まで順位を上げてくる。岡本はレース序盤にも関わらず、トップを走る佐藤にプレッシャーを掛け続ける。粘ってみせた佐藤だったが、ついに9周目で岡本はトップへ浮上する。しかし、佐藤も意地を見せて岡本をパス。2台はその後、交互に何度もトップに立つバトルを繰り広げる。じわじわと2番手を走る佐藤との距離を広げていくトップ走行の岡本は、最後は万全の態勢でこの日、2連勝を決めるトップチェッカー。次戦を待たずして、圧倒的な速さで今シーズンのシリーズチャンピオンを決めた。



2レース制のため、当日に行われた第4戦の結果を受けリバースグリッドを採用。上野大哲がポールポジションからスタートした



岡本大地(写真中央)は、何と今シーズン4戦4勝の強さ。早くもシリーズチャンピオンを確定させた

■F4 Class

ポールポジションからスタートした金井亮忠がホールショットを獲得すると、3番グリッドスタートの太田格之進も2番手に付け、これを山本幸彦らが追う展開になる。オープニングラップでKAMIKAZEがトラブルによりマシンを止めると、その影響から早くもセーフティカーが導入されることになる。3周目でセーフティカーランが終わり、金井、太田の順でレースは再開される。すると、4周目が終わる頃には太田が金井をパスしてトップに立つことに。やがて周回を重ねていくごとにトップを走る太田と2番手の金井との差は開き始め、ついに太田は独走態勢となる。後半にかけても太田は安定した走りで行なげなくレースを制することになった。



勝利した太田格之進は3番グリッドスタートだったが、スタートダッシュに成功。序盤の展開がレースの行方を左右した



優勝した太田格之進(写真中央)は、2位の金井亮忠と12秒979ものタイムギャップを築いてみせた

Voice of Pick up Driver

この日、キラリと光った
ドライバーに一问一答

この日、キラリと光ったドライバー&チームに一问一答
「Voice of Pick up Driver&Team」。

フォーミュラEnjoy Classで優勝！

辰巳 秀一 選手(イリオス TKS ミスト(株)PIERCE)



Q: 決勝レースは4番グリッドで迎えました。予選を終えて調子はいかがでしたか。

「今日はマシンに対して、ドライバーの私が合わせられない感覚でした。前の3人の方が明らかに速かったし、何とか後半に粘れたらと考えて決勝レースに臨みました」

Q: 後半に一度、大川文誠選手にトップを譲る場面もありました。

「大川さんが追いつけていたので、一度はそうなるだろうと考えていました。ヘアピンで抜き返したのですが、冷静に対応できて良かったです」

Q: 次戦はフルコースが舞台です。意気込みを聞かせてください。

「今日は勝って最高の日になりました。西コースよりも、リズムカルに走れるからフルコースの方が私は得意。次も勝ちたいです」